

スポーツボランティアをどのように語るのか
—立場と意味の変容に着目して—

廣瀬 慎也 (競技スポーツ学科 スポーツ情報戦略コース)
指導教員 豊田 則成

キーワード：ボランティア，立場，価値観，存在意義

1. 緒言

本研究は、B大学ボランティアサークルの学生は「ボランティア活動をどのように語るのか」というリサーチクエスチョン (Research Question:以下 RQ と略す)を設定し、ボランティア活動の意味をどのように得るのか、質的にアプローチを行い、発展継承可能で有益な仮説的知見を導き出すことを目的とした。

2. 方法

インフォーマント (Informant:調査対象者：以下 Inf. と略す) はB大学ボランティアサークルの学生、9名とし、Inf. 一人あたり1時間程度の半構造化インタビューを1対1で実施した。分析方法については、質的研究の代表的手法である、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Grounded Theory Approach:以下 GTA と略す)を用いて分析を行った。

3. 結果及び考察

分析の結果、左記のRQに対し、28個のカテゴリ、7個のカテゴリーグループ、3個のコアカテゴリーが生成され、B大学ボランティアサークルの学生は「他所者としてボランティア活動のことを安易に考えるが、当事者として活動を行っていくことで歩み寄る姿勢を示し、そして、活動中または、活動後にボランティア活動とはどういうものなのかという自らのボランティア活動に対する価値観を確立し、経験者として振り返ることにより、自身の存在意義を獲得していると語る」という仮説的知見が導き出された。

4. まとめ

結果及び考察から、B大学ボランティアサークルの学生は「ボランティア活動から自身の存在意義を獲得している」といえる。

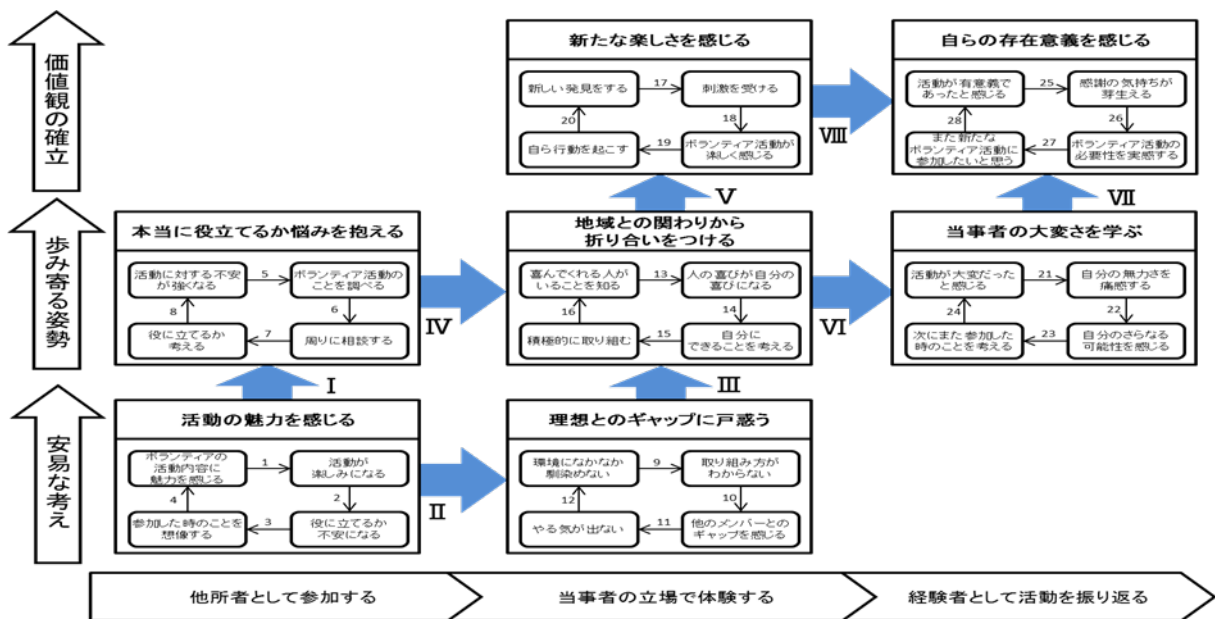


Fig.1 ボランティア活動を通して存在意義を獲得していくプロセス